

プラトン『プロタゴラス』篇再読

—349e1sqq. の議論の意味を中心に—

吉 田 雅 章

0

「徳とその部分との関係」という問題をめぐって議論を開始したソクラテスとプロタゴラスは、その間、対話の方法論やシモニデスの詩の解釈などを挟みながら、349a に至って再び当初の問題の場所へと戻ってくる。この問題に対する今回のプロタゴラスの回答は「智慧、節制、勇気、正義、敬虔の5つの徳はすべて徳の部分となすものであるが、そのうち4つは互いにかなり近いものであるのに、勇気だけはそれらすべてと極めて大きく異なっている(349d2-5)」というものであった。この回答をめぐって、両者の対話は本対話篇、最後の、そして最も重要な局面を見せることになる。

タイトルにも掲げたこの箇所をめぐっては、そこで取り扱われる「快と善の同一」説、いわゆる「アクラシア（不抑制）とその否定」、「徳は知に他ならない」との主張、などの問題に対する議論が集中し、諸家によって様々に論じられてきた。勿論、こうした諸家の議論に学ぶところは多いが、往々にして、『プロタゴラス』という対話篇全体への顧慮、即ち本対話篇が全体として何をめざしているのかという点に関する振り返りが欠如している場合が多いように私には思われる。

もし諸家が言うように、「徳は知に他ならない」ということを示すことが、この対話篇でのソクラテス（或いはプラトン）の目的であったとすれば、対話篇の掉尾近く、ソクラテスがこれまでの対話を振り返りながら、「こうしたことを論じ尽くした上で、〈徳が何であるか〉へも向かっていけたら、と思うのですが」⁽¹⁾と語る言葉は、何か理解しがたいものになるように思われる。むしろこの言葉は「徳が何であるか」を論じるに先立って、行わなければならないことがあり、それが「今ここで論じられた」との感を与えるのである。「徳が何であるか」に立ち向かう前に、考察する必要のあることとはどのようなことだったのか、それをこれからその基本的な枠組みにおいて検討してみたいと思う。

1

そこでまず、「勇気とその他の徳の部分との関係」が論じられる当該箇所に至る経緯のなかで、とくに重要と思われる事柄をいくつか確認しておきたい。

プロタゴラスについて学ぶことを熱心に求めるヒッポクラテスから、口添えの申し出を

⁽¹⁾ 361c4-5, βουλοίμην ἂν ταῦτα διεξελεθόντας ἡμᾶς ἐξελεθεῖν καὶ ἐπὶ τὴν ἀρετὴν ὅτι ἔστιν.

受けたソクラテスは、プロタゴラスとの面会に先立ち、「プロタゴラスからの学びが如何なるものであるか」についてヒッポクラテスに問い質す。これが本対話篇の導入部である。この対話(310a8-314c2)において、確認しておかなければならないのは、次の点である。

(1)まず、ソクラテスの「プロタゴラスからの学びは如何なるものか」に関する問いは、技術知(専門的知識)との対比において問われ、ヒッポクラテスが学ぼうとしているのは決して諸々の技術知に相並ぶ知、専門的知識ではなく、読み書きや堅琴弾きや体育と同様の、素人であり自由人としての学び、即ち教養のための学び⁽²⁾であるとされる点である。

(2)プロタゴラスからの学びを極めて熱心に希っているにも拘らず、ヒッポクラテスは「ソフィストからの学びとは一体何か」、「ソフィストとは一体何ものか(312c1-2, 313c1-2)」という問いに、結局答えることができない。「人を語るに凄腕のものとする(312d6-7)」との答えも、「何に関して人を語るに凄腕のものにするのか」との問いの前に最終的についえ去る。これは単にヒッポクラテス個人の事情ではなく、勿論一般的に語りうる事柄として描かれている。

(3)ソクラテスはヒッポクラテスに対し、ソフィストについて学ぶことの危険について、「君の一切がうまくいくか、まずくなるかがそれに懸かっているその魂(自分自身)」⁽³⁾を危険にさらすことになるのであって、彼らが売り捌く「学び」の「有益か有害か」は、「魂にかかわる癒し手」でもないかぎりには識別できないことを警告する。

以上の点からすると、この『プロタゴラス』篇の劈頭においてすでに、これからのプロタゴラスとの会見・対話は「ソフィストとは一体何ものか」、「ソフィストからの学びは一体何なのか」をめぐって展開するであろうことが予示され、しかもその学びは専門的知識からは区別される「人の大事にかかわる学び」であることが示されている。これが『プロタゴラス』篇の大きな枠組みを決めているひとつである。

次にプロタゴラスとの対話およびプロタゴラス説話の箇所(317e3-328d2)をめぐって、特に後の議論との関係で重要と思われる、若干のことを確認しておかなければならない。

(1)ソクラテスの求めに応じ、プロタゴラスは自らが教えるものを「国家公共のための技術」であり、「人をよき市民とする」こととして提示する。これに対しソクラテスは、(a)民会における専門的技術にかかわる審議の場合とポリスの運営の場合における人びとの態度の相違、および(b)市民のなかでも最も智慧があり優れた「ペリクレスのごとき人」にして、その徳を他人に授けることができないという2つの理由をもって、プロタゴラスの言うその技術は「教えられないのではないか」と述べ、その点への教えを乞う。

⁽²⁾ 正確に言えば、ソクラテスは、ヒッポクラテスがプロタゴラスからの学びを、読み書きや堅琴弾きや体育の先生からの学び——それらの学びの各々は技術のために、専門家になろうとして学んだのではなく、教養のために、素人として自由人として学んだ——と同じようなものと捉えているのではないか、と示唆しているなのであって、ソクラテス自身がプロタゴラスからの学びを教養と捉えているのではない点には注意が必要である。

⁽³⁾ 313a8, τὴν ψυχὴν, καὶ ἐν ᾧ πάντ' ἐστὶν τὰ σα ἢ εὖ ἢ κακῶς πράττειν. 魂はまた「君自身(σαυτόν)」(313b5, c2)とも言われている。

(2)プロタゴラスはソクラテスの疑義に答えるために、神話の形で、人間に授けられた智慧を専門的技術と国家公共のための智慧（技術）という2つの形で区別し、後者のためには節制（つつしみ）と正義（いましめ）がすべての人びとに授けられたと語る。

(3)専門的技術から区別される、この「正義や節制の徳」は国家社会存立のためになくはならぬものである以上、現に教えられており、また万人が専門家として分けもっているはずである。ただし、笛吹にも下手と上手がいるのだから、国家社会存立のための徳についても、自分のように、「人を善美なる人にする」教師⁽⁴⁾が存在する、とプロタゴラスは語る。

さて、専門的技術とは鋭く対立的に捉えられている国家公共のための技術・智慧には、国事の処理に絶大な能力を発揮したペリクレスという人物への言及によってその具体的な実質が暗示的なかたちで与えられているが、プロタゴラスの教えるという智慧はそうしたペリクレスのそれに代表される徳であり、プロタゴラスに師事してその智慧を学ぼうとしている多くの青年が得ようと望んでいるものもまさにそれである。ソクラテスが「教えられうるか」と問うた問いは、そうした多くの人びとの理解とソフィストの活動とが互いに呼応し合う、丁度その場に向けられている。両者が呼応し合う場所では、すでに「徳の何であるか」はペリクレスを代表格とする「あれ」として、まざまざとそこに見えている。だからそれは問題ではなく、それを「如何にして手に入れるか」が偏に問題なのだとして理解されている。これに呼応して、プロタゴラスの公言する人間教育も「そういうものとしてある」と暗々裡に理解されている徳を「如何にして手に入れるか」という意味での教育であった。

こうした状況を前に、ソクラテスは、プロタゴラスが国家社会存立のための徳とした節制と正義、そして後に加えられる敬虔、勇気、智慧について、まずそれらの間の関係を探ることから始める。それが『プロタゴラス』篇のもう一つの大きな枠組みを形成している。

2

標記の箇所、即ち徳とその部分との関係が再び取り上げられ、今度は勇気と智慧をめぐってその関係が問題となる 349e 以下の議論の検討に移ろう。プロタゴラスは再度、徳とその部分との関係について考えを求められて、「極めて不正、不敬虔、放埒、無知でありながら、勇気だけは並外れているという人びとは多い」ということを理由に、「徳の他の部分は互いに近いが、勇気だけは著しく異なる。」と答える。以下、問題として取り上げられるのは、このうち「智慧と勇気の関係」である。プロタゴラスのこの回答をめぐって開始される議論は大別して次の3つに分けられる。

(1)第1の議論（およびプロタゴラスの反論）(349e1-351b2)

(2)第2の議論 (351b3-359a1)

⁽⁴⁾ 328b2-3, διαφερόντως ἄν τῶν ἄλλων ἀνθρώπων ὀνήσαι τινα πρὸς τὸ καλὸν καὶ ἀγαθὸν γενέσθαι.

(3)第3の議論 (359a2-360e5)

以下、順次その議論を検討していく。

第1の議論では、技術知の場面を通じて、「智慧が勇気に他ならない」との結論が導かれる。勇気をめぐるこの第1の議論は、諸家によって、ソクラテスが「徳は知に他ならない」という自らの教説を証明しようとした第1段階と考えられることが多い。しかし果たしてそうした理解は正しいのか。この箇所の議論をそのように理解することは、むしろこの『プロタゴラス』篇を読み誤りへと誘い込むその第一歩であるように思われる。

プロタゴラスの「無知でありながら、勇気ある人がいる」(以下、[AD])との回答を前にして、今ソクラテスが行おうとするのは、決してプロタゴラスのこの主張 [AD] に対して自説を展開することではなく、プロタゴラスその人のこの答えの意味を吟味してみる⁽⁵⁾ことである。即ち、ソクラテスはプロタゴラスの [AD] およびそれに密接に関連して彼が真と考え抱いているいくつかの信念を問答によって取り上げ、そうした勇気をめぐる彼の一連の信念の真偽を吟味・検討しようとしているのである。このことは勿論、この第1の議論に限られることではない。続く第2、第3の議論においても、遂行されているのは、基本的に、プロタゴラスの勇気をめぐる一連の信念の吟味・検討なのである。それはプラトンの他の初期対話篇において、ソクラテスがつねづね行っている対話相手の信念の吟味・検討と同じものである。この点に注目することは『プロタゴラス』篇を読み解く上で重要であると考えられる。

さて、プロタゴラスの [AD] を取り囲むそうした信念として、「勇気ある人は大胆であり、多くの人びと (=臆病な人) が恐れる事柄へつき進む人でもある」[AD-1] と「徳は全体として (したがって勇気も) 美しい」[AD-2] という、ふたつの信念が取り上げられている。第1の議論は、勇気をめぐるプロタゴラスのこうした一連の信念にあって、「勇気ある人」の「大胆で、ものを恐れない」という行為が「それに基づくそれ」、「そこから出てくるそれ」のひとつの候補として、「智慧」を提示することにあつた。勿論それによって、プロタゴラスの [AD-1] という信念を理解可能とする場面が開かれることになるが、しかしそれはまたプロタゴラスの当初の「無知でありながら、勇気ある人がいる」[AD] との間に齟齬を生むことにもなるというのがその議論の目指すところである。

その場合、ソクラテスがこの第1の議論で取り上げた3つの事例 (潜水夫、騎馬術を心得た人、楯兵) が明示しているように、ここで取り上げられている智慧 (σοφία) は、技術知、とりわけ「危険を孕む状況下で、いかにして危険を回避するか」の知であって、決して一般的な意味での知ではない。勿論そういう技術知をまったく持っていないのに、「大胆に振舞い、多くの人びとが恐れる事柄へつき進む」人びとがいる。しかしそういう人びとは正気ではなく、そういう人びとのものを恐れない大胆な行為は醜いものであるから、上

⁽⁵⁾ 349e1, ἄξιον γὰρ τοι ἐπισκέψασθαι ὃ λέγεις とされている点に十分留意したい。

記の「徳は美しい」との観点から、そうした正気を失った人びとを排除した上で、「智慧こそが勇気なのではないか」というのがソクラテスの論の運びであった。ところが、プロタゴラスはこの「いかにして危険を回避するか」の知（技術知）を勇気とすることに肯んじない。彼はソクラテスの論の運びに異議申し立てを行い、技術知を有する人びとは確かに大胆であるが、その人びとが勇気ある人びとではない、「大胆で、ものを恐れない振舞い」は確かに技術知からも生じるが、勇気は魂の生まれつきとその善き養いから生れる、とソクラテスに反論することになる。とすれば、この問題はより基本的な場面での考察が求められることになる。

3

第2の議論の検討に移ろう。この箇所では、まず「善く／悪く生きる(εὖ / κακῶς ζῆν)」ということ、さらにそれに密接に関連するものとして、「知識と行為との関係」が取り上げられるが、この「善き／悪き生」への、唐突とも見える話題の転換に諸家の多くが戸惑いをみせている。しかし先に確認しておいたように、ソクラテスはヒポクラテスとの対話において、プロタゴラスというソフィストに身を委ね、徳を学び、人間教育を受けることは、「自らの一切がうまくいくか、まずくなるかが、それに懸かっているその魂を危険にさらすことになる」と警告していたのであった。だとすれば、今まさしくこの地点からプロタゴラスの徳の把握が吟味されようとしているということになる。

まず「善き生」をめぐる問題の展開を追いかけてみよう。この箇所は快樂主義がソクラテスによって導入されると看做されている最初の箇所であるが、「快く生きることは善く、不快に生きることは悪ではないか」と問いかけるソクラテスに対して、プロタゴラスは「美しい事柄を楽しみながら生きるのであれば」⁽⁶⁾との制約を付す。ソクラテスはこれに対し、驚きの口調をもって、「よもやあなたも、多くの人びとと同様に、或る快は悪であり、或る苦痛は善いと呼ぶのではないでしょうね」と応じる。

「楽しみ（快）」に対して、「美しい事柄を」と制約を付すプロタゴラスの答えに対し、ソクラテスは「美しい」という言葉を見捨て、或いはそれを取り去って、ともかくも「楽しみ（快）」に何らかの制約が付されねばならないのみ受け取り、その制約を「善／悪」へと置き換え、しかもそうした「快いものの中にも悪いものがあり、苦痛なものにも善いものがある」との理解はまた、多くの人びとの理解に与するものであるとするのである。このやりとりのもつ意味は殆どの解釈者によって看過されているようであるが、この点をどのように理解するかは『プロタゴラス』篇理解のひとつの重要なポイントがあると私には思われる。ソクラテスはプロタゴラスの答えから「美しい」という制限を消し去り、「善／悪」に置き換えることによって、一体何をもちろんでいたのだろうか⁽⁷⁾。

⁽⁶⁾ 351c1-2, εἶπερ τοῖς καλοῖς γ', ..., ζῶν ἡδόμενος.

⁽⁷⁾ *Menon*77b-78b においてソクラテスは、χαίρειν τε καλοῖσι καὶ δύνασθαι という詩人の言葉に基づくメノンの徳の定義 ἐπιθυμοῦντα τῶν καλῶν δυνατὸν εἶναι πορίζεσθαι を検討する

それは「美しい」という価値を消し去る場合、「快いものの中にも悪いものがあり、苦痛なものにも善いものがある」という言葉・信念が何を意味することになるのか、そしてその場合「善き生」というのはどのようなものとならざるを得ないか、ということを示すためのものであったと考えられる。ソクラテスはこの「美しい」という価値を外すことによって、後に見るように、多くの人びと（そしてプロタゴラス）が、或る行為を善と呼ぶ場合、それを善と呼ぶために目を向けるべきものが「快」でしかありえないことをあらわにすることによって、「快と善の同一」を示してみせているのではないか。

だが何故、ソクラテスはプロタゴラスの答えから「美しい」という価値を外し、そ知らぬ振り、それを「善／悪」による制約へと置き換えることができたのだろうか。それはプロタゴラスが「徳は美しい」[AD-2]と口にしながら（認めながら）、また上記のように快楽に「美」による制約を加えながらも、しかし「その〈美〉とは徳（勇気）にとって一体何であるのか」ということがまったく顧慮されていない状況を見抜いて、のことであったと考えられる。[AD-1]と[AD-2]の信念の並立がそのことを物語っている、と言え、この点に関してはやや先走りの感があろう。勇気という徳にとって「美」が如何なる意味を持っているかは、第3の議論において考えてみなければならない問題である。従って、その箇所を改めて取り上げることとして、この「善き生」をめぐる「快と善との関係」について、次の点を確かめておきたい。

4

先のやりとりが続いて、ソクラテスは「快いものは快いというそのかぎりでは善なのではないか」となおもプロタゴラスに問い迫るが、プロタゴラスはそれには応じず、「快のうちにも悪しきものがあり、苦痛にも善きものがある」（以下、「快／苦に悪／善の別がある」とすることがある）という「多くの人びと」と同じ主張を保持したまま、それを考察に付すことを提案する(351e3-7)。この「快と善の同一」の主張（快楽主義）をソクラテスの説であると理解する諸家は多く、第1の議論と後に見る第3の議論における「徳は知に他ならない」というソクラテスの主知主義的解釈と並んで、『プロタゴラス』篇解釈のひとつの結節点を構成している。しかしそうした理解は可能であり、そして許されるのだろうか。その点を考えるために、続く議論について、その基本的な「論の運び」とそれが何を意味しているのかを検討してみなければならない。

「善き生」をめぐる「快と善の関係」において、プロタゴラスは「多くの人びと」の理解と同じように、「快／苦に悪／善の別がある」という立場を取り、「快を善と同一視する」立場に疑義を呈した。プロタゴラスが言うように「快には悪しきものもあり、苦には善きものもある」のか、それともソクラテスが問い迫るように「快は快であるかぎり、善であ

際に、まず ἄρα λέγεις τὸν τῶν καλῶν ἐπιθυμοῦντα ἀγαθῶν ἐπιθυμητὴν εἶναιと問いかけ、この箇所と同様に、καλόνをἀγαθόνに取り換えた上で、その後の議論を展開している。

り、苦は苦であるかぎり、悪である」のか、が問題であった。それを考察しようとのプロタゴラスの提案に従い、「快と善の関係」を明らかにする方法として⁽⁸⁾、プロタゴラスの「知に対する態度」が問われる。智慧・知識を「人間にかかわる事柄の中で最もすぐれたもの」と語ることによって、プロタゴラスが「行為に対する知識の支配力を認める」立場を表明するに至るや、ソクラテスはその対極に位置する「多くの人びと」の知に対する態度、つまり「快楽や苦痛その他のものがしばしば行為を支配する」と主張する「多くの人びと」の立場を吟味の対象として取り上げ、「最善のことを知りながら、快楽に負けて、それを為さずに別のことを為す」という場合の、「快楽に負ける」というパトスが何であるかを説明しようとするのであった。

勿論、この「快楽に負ける」というやり方で行為を説明する場合、当然「快には悪しきものもあり、苦には善きものもある」との理解がその前提になっている。ところが、「快楽に負ける」というパトスを分析していくことによって、「多くの人びと」は確かに名辞の上では、「快と善」を区別しているけれども、或る行為を「善／悪」と呼ぶとき、目を向けるべき最後のものとしては「快／苦」しかない⁽⁹⁾のであれば、結局のところ「快を善と考え、苦を悪と考えている」ということが判明することになる。これはソクラテスが第2の議論の冒頭で、プロタゴラスの「快には悪しきものもあり、苦には善きものもある」という主張に対し、「快いものは快いというそのかぎりでは善ではないか」と問い迫った立場に他ならない。

とすれば、この議論の基本的な「論の運び」は、次のように理解されなければならないだろう。当初の「よき生」をめぐる「善と快の関係」について、プロタゴラスは「快／苦に悪／善の別がある」という、多くの人びとと同じ立場を取ったわけだが、「多くの人びと」の知に対する態度として、「快楽に負ける」というパトスが何であるかを分析し、説明するというやり方で、実は「多くの人びと」の「善と快の関係」の理解が吟味されていると同時に、プロタゴラスのそれも吟味されているということになる。しかも、「快に負ける」というパトスの分析は、勇気を他の徳からは著しく異なるものとして区別した、かのプロタゴラスの表明・信念 [AD] の吟味に資することとして遂行されている⁽¹⁰⁾点に十分注意しなければならない。

以上の確認は、まず「快と善の同一」説をソクラテスその人の立場であるとする解釈を明確に拒絶するものとなろう。ソクラテスは「快と善の同一」説を受け入れようとしないプロタゴラスに向かって、自説としての「快と善の同一」説を唱えているわけではない。吟味・検討されているのはあくまでも「多くの人びと」の信念・見解であり、そしてそういう信念を有する「多くの人びと」を相手に、徳の教育と称してソフィストの術を繰り広

⁽⁸⁾ 352a1, ἀρ' οὖν, ..., τῆδέ πη καταφανὲς ἂν ἡμῖν γένοιτο;

⁽⁹⁾ 354b7-c2, ἔχετέ τι ἄλλο τέλος λέγειν, εἰς ὃ ἀποβλέψαντες αὐτὰ ἀγαθὰ καλεῖτε, ἀλλ' ἡ ἡδονὰς τε καὶ λύπας;

⁽¹⁰⁾ 353b1-3, εἶναί τι ἡμῖν τοῦτο πρὸς τὸ ἐξευρεῖν περὶ ἀνδρείας, πρὸς τὰλλα μόρια τὰ τῆς ἀρετῆς πῶς ποτ' ἔχει.

げるプロタゴラスの信念・見解である。そして吟味の結果、そこに示されているのは、「快／苦に悪／善の別がある」と主張する「多くの人びと」およびプロタゴラスの立場は、一見すれば「快と善の同一」説とは正反対に見えるけれども、実はまさしくその「快と善の同一」説こそが、「多くの人びと」、そしてプロタゴラスの立場なのだとということである。

勿論プロタゴラスは、「行為と知識の関係」をめぐっては、「多くの人びと」とは異なり、「知識は行為を支配する力をもつ」と表明していたから、この点では「多くの人びと」に与していないのではないかと疑義もあろう。その通りである。するとその点をどのように理解すべきか、しばし「快樂に負ける」というパトスの分析後の「論の運び」を検討してみよう。

「快樂に負ける」というパトスの分析の結果、「多くの人びと」は快を善と考え、苦を悪と考えていることが判明した。そこでソクラテスは4つある名辞をどちらか1組ずつ用いることによって、「悪／苦痛と知っていながら、善／快樂にうち負かされて、それを行う」という行為の説明が馬鹿げたものであって、説明としては体を成さないことを示し、それに代わる納得可能な説明の途を見いだそうとする。即ち、「より少ない快樂（善）を取る代償として、より大きな苦（悪）を取る」として説明しようとするのである。そして、多くの人びとが快樂主義の原則を外れるこうした行為を行うのは、彼らが「快／苦」の計量術をもたないが故に、「現象のもつ力」に惑わされて、遠近を含む「快／苦の量」に関して判断を誤るからであると論じる。「多くの人びと」は快樂主義を採用しながら、しかしその快／苦の量を計ることにかけては無知であるからこそ、過った行為を行うのであり、快樂に負けるとは、まさにこの知の欠如、無知にほかならない。そしてこのプロタゴラスこそ、まさしく「その無知の癒し手である」と主張している⁽¹¹⁾と語られる。

これは、プロタゴラスの主張する「行為を支配する知識」或いは「人間にかかわる事柄の中で最もすぐれたものである智慧」が、もし知として成立するのなら、それは実のところ「多くの人びと」（そしてプロタゴラス）の快樂主義の立場での「快／苦」の計量術に他ならないということが明らかにされたということである。勿論、果たして「快／苦」の計量術がほんとうのところ、知として成立するか否かは問題であろう⁽¹²⁾。しかしプロタゴラスおよび「多くの人びと」の「快と善の関係」をめぐる信念の吟味からすれば、プロタゴラスの主張する「人間にかかわる事柄の中で最もすぐれたものである智慧」とは「快／苦」の計量術としての知であらざるをえないことをこの議論を語っているのである。

ところで、この第2の議論もまた、先に指摘したように、決してそれだけのための議論ではなく、勇気とその他の徳との関係を明らかにするためのもの(353b1-3)であった。ソクラテスは次に、以上に見てきたような第2の議論を前提にして、勇気をめぐるプロタゴラ

⁽¹¹⁾ 357e2-3, ἀμαθία ἢ μεγίστη, ἥς Πρωταγόρας ὁδε φησὶν ἰατρός εἶναι

⁽¹²⁾ 357b5-6, ἥτις μὲν τοίνυν τέχνη καὶ ἐπιστήμη ἐστὶν αὕτη, εἰς αὐθις σκεψόμεθα. ここで語られる μετρητικὴ τέχνηについて、それがどういう技術・知識であるかが保留されているのは知としてのその身分が疑われているからであろう。

スのかの主張・信念 [AD] を弁明してもらおう⁽¹³⁾と提案する。これが第3の議論を形成する。

5

第3の議論は、5つのアレテーの内、勇気のみが他からは大いに異なったものとする、かのプロタゴラスの主張 [AD] の確認をもって始まる。そしてソクラテスが問題として取り上げるのは、第1の議論では議論の前提になっていた「勇気ある人は大胆であり、多くの人びと (=臆病な人) が恐れて向かおうとしない事柄へとつき進む人でもある」[AD-1] という、かのプロタゴラスの信念である。この信念は当然、「勇気ある人」と「臆病な人」が別のものに向かうことを含意しているわけだが、ではその両者が向かう「別のもの」とは一体何なのか、臆病な人びとは恐ろしくないものに、勇気ある人びとは恐ろしいものに向かうのか、とソクラテスはプロタゴラスを問いつめる。プロタゴラスはその主張・信念を「多くの人びと」に押しつけて、自らは身を翻そうとする⁽¹⁴⁾が、第1の議論における彼の当初の信念からすれば、彼は当然これを肯定せざるをえない。

ソクラテスはアクラシアの議論を終え、「勇気と智慧」の問題に移行するに先立ち、プロディオコスやヒッピアスらを相手に、これまでの議論をまとめつつ「勇気と智慧の関係」を考察するための前提を確認している。その前提には、「恐れは悪の予期(358d6-7)」であり、「誰も恐ろしいと考えているものに自ら進んで向かう者はいない(358e2-6)」ということが含まれているが、これを認めるかぎり、勇気ある人と臆病な人が別のものへ向かうということをプロタゴラスは肯定できない状況に陥っている。即ち、勇気ある人も臆病な人も、その人が向かおうとし、また向かおうとしない何らかの行為を、それぞれ「恐ろしくない／恐ろしい」と看做し評価しているかぎりにおいては、両者ともに同じ行為へ向かう⁽¹⁵⁾ことをプロタゴラスは受け入れざるを得ない。すると、勇気ある人と臆病な人とは、何ら区別はないということになるのか。

プロタゴラスが自らの信念をめぐる今直面しているアポリアは、これまでの第2の議論からすると、「勇気ある人は臆病な人が向かうのとは異なり、恐ろしいと考える行為に向かう」とすることもできず、しかしまた、プロタゴラスの当初の表明・信念からすると、「勇気ある人が恐ろしくないものに向かう」とすることもできないという点にある。

立ち足るこのアポリアを前に、その行為の評価には触れないままに、「とはいえ、一方は戦に赴くが、一方は赴こうとしないわけで、まさにその点において、勇気ある人と

⁽¹³⁾ 359a2-4, τούτων ὑποκειμένων, ..., ἀπολογείσθω ἡμῖν Πρωταγόρας ὅδε ἂν τὸ πρῶτον ἀπεκρίνατο πῶς ὀρθῶς ἔχει. 弁明という行為は自らの言動等に対して、なぜそうなのか、なぜそうしたのかを釈明しあらわにするものであろう。丁度ソクラテスの弁明のように。

⁽¹⁴⁾ 359c6-7, λέγεται δὴ, ..., οὕτως ὑπὸ τῶν ἀνθρώπων. 「多くの人びと」にこの [AD-1] を押しつけて、身を翻そうとするプロタゴラスの態度には、プロタゴラスの勇気をめぐるこの信念が、実はまた「多くの人びと」のそれでもあった、ということが端的に示されている。

⁽¹⁵⁾ 359d8-e1, ταῦτη γὰρ ἐπὶ τὰ αὐτὰ ἔρχονται οἱ δειλοί τε καὶ οἱ ἀνδρείοι.

臆病な人は反対の行為に向かう」との主張を繰り返すプロタゴラスに対して、ソクラテスが次に問う問いは、プロタゴラスのこのアポリアにひとつの途を拓くものとなっている。即ち、ソクラテスはもはや「戦に赴くことを恐ろしいと考えているか否か」ではなく、「美しいこととして戦に赴くのか、それとも醜いこととしてか」⁽¹⁶⁾と問う。

注目すべきはこのソクラテスの問いのもつ意味である。或る行為を「恐ろしいとか、恐ろしくないとか」といったレベルのみで捉えているかぎりでは、先のアポリアを解くことは勿論できないだろう。そのことは別の面から考えれば、或る行為について「恐れる、恐れぬ」ということだけを問題にするかぎり、勇気という徳を問題にできる場面は未だ現われていないということでもある。プロタゴラスは第1の議論において、「勇気ある人は大胆であり、ものを恐れぬ」[AD-1]という表明（信念）とともに、「徳（勇気）は美しい」[AD-2]ということを確認していたが、ソクラテスのこの問いは、この「勇気は美しい」との信念が勇気をめぐるプロタゴラスの他の信念を十分に規定していない（[AD-1]がそれである）ことに対して、殆ど決定的な問いとなる。

この問いをきっかけとして引続き、「勇気ある人びとは、恐れる場合にも、醜い恐れを恐れることはなく、また醜い大胆さを発揮することもない(360a8-b2)」し、「臆病な人も大胆な人も気が狂っている人も、醜い恐れを恐れ、醜い大胆さを発揮する(360b4-6)」と語られることになる。まさにこの点でプロタゴラスの当初の信念 [AD-1] は否定される。勇気ある人は行為に際して「恐れる」ことも「恐れぬ」こともある。問題は恐れるか否かではなく、その恐れや大胆さが「醜いのか、美しいのか」にある。

ところでしかし、この「美／醜」という観点はいかにして導入され、そしてそれは何を物語っているのか、その点を確認する必要がある。

第2の議論の冒頭箇所を確認したように、ソクラテスは「美しい」という価値を消去した上で、多くの人びとおよびプロタゴラスの「快／苦に悪／善の別がある」という表明・信念が何を意味することになるのか、そしてその場合「善き生」というのはどのようなものとなるかを確認しようとした。その際、ソクラテスが、プロタゴラスの語る「美しい事柄を楽しみながら生きるのであれば」という言葉から何故「美」を消去できたかと言えば、「徳（勇気）は美しい」と口にしても、それがプロタゴラスの勇気をめぐる他の信念を規定していない点を見透かしてのことであった。

ところが、ソクラテスは、先に見たソフィストたちを相手に「勇気と智慧の関係」を考察するための前提を確認するなかで、快樂主義の承認を求めながら、この「美」を再び登場させ、「苦しみなしに快く生きることをめざす行為はすべて美しい行為であり、美しい仕事は善くかつ有益なのではないか」⁽¹⁷⁾と問いかけている。

注目すべきは、これまでの快樂主義のように、快ならば善（快的な生なら善き生）とい

⁽¹⁶⁾ 359e4-5, καλὸν ὃν ἰέναι ἢ αἰσχροῦν;

⁽¹⁷⁾ 358b3-6, αἱ ἐπὶ τούτου πράξεις ἅπασαι, ἐπὶ τοῦ ἀλύπως ζῆν καὶ ἡδέως, ἄρ' οὐ καλά; καὶ τὸ καλὸν ἐργον ἀγαθὸν τε καὶ ὠφέλιμον;

うのではなく、快と善の間に「美」を介在させるかたちで、それまで消去されていた「美」を復活している点である。簡単に言えば、それは「(a)快ならば美であり、(b)美ならば善である」と語られていることになる。そして、これに続く今問題の箇所(359e3-360c1)では、まずこの(b)を用いるかたちで、戦に赴く行為が「美ならば、善」と語られ、さらに「(c)美かつ善ならば、快」と語られることになる。

ここには、何かを「善／悪」と呼び「善／悪」と捉える際に、「快／苦」に加え、「美／醜」のあることが示されているのである⁽¹⁸⁾。先に見たように、「美／醜」は、或る行為を「恐ろしい」というレベルで捉えているかぎりでは現われて来ない。「美／醜」がその姿を見せるのは、「恐れている」自己へとまなざしが向けられ、「恐れているそのこと」が「美しいのか、醜いのか」が問われるまさにその時であろう。

とすれば、ここでソクラテスはこの「美しいのか、醜いのか」との問いによって、恐れに囚われている状態から、徳をほんとうに問題にできる場面へと抜け出る通路を用意しているのだと思われる。と言っても勿論、この第3の議論の箇所も快樂主義の文脈の下にあることは確かである。にも拘らず、或る行為を「善／悪」と呼ぶとき、目を向けるべき最後のものとしては「快／苦」しかなく、結局のところ「快を善と考え、苦を悪と考える」快樂主義から抜け出すその途を「美／醜へのまなざし」として示唆していると思われる。

6

さて、この第3の議論の最後に、勇気が「恐ろしいものと恐ろしくないものの智慧(360d4-5)」として明らかにされる。言うまでもなく、これはプロタゴラスの「無知でありながら、勇気がある人がいる」[AD]と相容れず矛盾するわけだが、ではこの「勇気とは恐ろしいものと恐ろしくないものの智慧」[AD-S]とは、諸家が主張するように、ソクラテスその人の学説の証明だったのだろうか。と言えば、これまで検討してきたところからして、それは殆ど承認できないように思われる。ではこの[AD-S]という主張は一体何を意味しているのだろうか。それは当然、プロタゴラスのかの[AD]という表明・信念を考察してきた、その考察の至り着くところに他ならない。その点を、繰り返しも含め、確かめておきたい。

上記の「美の復活」に際して述べたように、「快樂主義」が採用されるとき（もし快が善であるのならば）、誰であれ、恐ろしいと考えるものへは向かわないし、恐れぬものへは

(18) プロタゴラスは第2の議論の冒頭で、「美」を快に対する制約として、即ち快とは別の、快より上位の価値として語っていた。ところが、美を再び登場させる箇所では、「苦しみなしに快く生きることを目指す行為はすべて美しい行為である」と言われているように、「美」はここでは、「快とは別の、快より上位の価値であって、快に制約を加えるもの」ではなく、快と相並ぶ価値として語られている点に注意しなければならない。その意味でなお、快樂主義の文脈下で語られていることであるが、しかしまなざしがどこへ向けられているかによって、その行為を首肯する観点も変わってくる。前註に掲げた原文を参照。

誰もが向かうのだから、勇氣ある人も臆病な人も同じものに向かうということになる。この点で「勇氣ある人は臆病な人が恐れて向かおうとしないものへと向かう」という、プロタゴラスの当初の表明・信念は否定され、行為に着目するかぎり、両者に区別はなく、同じものに向かうことになったのである。

しかしプロタゴラスはなおも、勇氣ある人と臆病な人が向かうのは正反対のものだと主張し(359e1-3)、その事例として「戦に赴くこと」を挙げたのであった。これに対し、ソクラテスは「戦に赴くという行為を一体何として行うのか」を問う観点として「美／醜」を示唆することになった。それは再び、勇氣ある人と臆病な人の区別をもたらすが、問題はその区別が何に基づいているかにある。

「臆病な人も大胆な人も気が狂っている人も、醜い恐れを恐れ、醜い大胆さを発揮する場合、醜い恐れを恐れ、醜悪な大胆さを発揮するのは無知ゆえである(360b4-7, cf. 360a4-6)」と語られる。臆病な人が醜い恐れを恐れるのは「無知」ゆえと言われる場合、その無知とは、恐れに拘束されて、その情が与える「快／苦」に根ざす「善／悪」の判断以上に、「恐れる」そのことが「美しいのか、醜いのか」へのまなざしをもっていないという意味であろう。しかし「美ならば善」という、「美を介してそれがまた善であることが明らかになる」途へのソクラテスの示唆はここまでで、臆病な人は、「如何なる無知」のゆえに臆病なのかを語るソクラテスの言葉は、「快ならば善」という、あの快樂主義の場面に戻っている。即ち、「臆病な人は、恐ろしいものの無知ゆえに、臆病なのだ(360c2-3)」と語られるのである。そしてこの無知と正反対のものとして、「勇氣とは恐ろしいものと恐ろしくないものの智慧(360d4-5)」[AD-S]であると結論づけられることになる。

なぜソクラテスは、先に述べたように、徳をほんとうに問題にできる場面へと抜け出る途を、或いはまた今述べたように「美を介してそれがまた善であることが明らかになる」途を示唆しつつも、再び快樂主義の場面へと立ち戻って「勇氣とは恐ろしいものと恐ろしくないものの智慧」と結論づけるのだろうか。それは、プロタゴラスの立ち位置がまさにそこにあるからに他ならない。その立場にあっては、恐れは悪の予期であり、恐れているものは悪しきものと考えられているわけだから、「恐ろしいものと恐ろしくないもの」を過つことなく選びとる智慧が勇氣なのであり、その知の欠如(=無知)が臆病ということにならざるをえない。それが最後にプロタゴラスを黙らせる⁽¹⁹⁾、彼に突きつけられたプロタゴラスその人の信念の考察結果なのであった。

7

このように見てくると、『プロタゴラス』という対話篇は、「ソフィスト(プロタゴラス)とは一体何ものか」、或いは「ソフィスト(プロタゴラス)からの学びとは一体何か」ということを基本的な問いとしながら、より限定されたかたちで「勇氣と智慧との関係」をめ

⁽¹⁹⁾ 360d6, οὐκέτι ἐνταῦθα οὐτ' ἐπινεῦσαι ἠθέλησεν εἰσίγα τε.

ぐるプロタゴラスの信念を検討することを主題としていると言えよう。

この点に関しては、取り上げた 349e1 以下の議論のなかで、普段諸家が殆ど顧みないひとつの言葉に注目しておきたい。それは第 1 の議論のなかで、「徳は全体として（したがって勇気も）美しい」ということを、プロタゴラスに向かってソクラテスが確認する箇所である。そこでソクラテスは「徳は美しいと主張するか」と問うた後、続けて「徳は美しいものだというので、あなたは徳の教師だと自認なさっているのですね」⁽²⁰⁾と確認している。「徳の教師」を自認するというのは、当然ながら、「徳が何であるかを知っており」、そして勿論「その徳を他人にも授けることができる」と自認することに他ならない。

即ち、ソクラテスがここでプロタゴラスに対して確認しているのは、『プロタゴラス』篇の前半で述べられた「人間教育」、「徳の教育」、「人を善美なる人にする教育」といった、プロタゴラスが人びとに約束していることである。そのプロタゴラスの「ソフィストとしての活動の何であるか」、換言すれば、「ソフィストの何ものであるか」の考察が、今「勇気と智慧の関係」の考察という、より限定された仕方で行われているのである。ここでは偏にプロタゴラスが「徳の教師」として、或いは「人を善美なる人にする」教師として、「勇気と智慧」との関係をどのように捉え、どのように理解しているかが吟味されている。

では、なぜそれが必要だったのか。すでに 1 で述べたように、多くの人びともプロタゴラスも「徳の何であるか」はすでに承知していると思っているが、「徳の何であるか」は承知していると思っている人には、当然ながら「徳とは何であるか」との問いは決して生じないからである。従って、「徳の何であるか」を承知していると公言する人の信念を徹底して吟味し、その欺瞞を暴き、徳に関する無知をあらわにする必要があった。それが本稿冒頭に触れた本対話篇の掉尾近くで語られた「こうしたことを論じ尽くした上で、〈徳が何であるか〉へも向かっていけたら、と思うのですが」という、あのソクラテスの言葉の意味だったのではないか。

後記

本稿は、第 15 回ギリシャ哲学セミナー（2011 年 9 月 10～11 日に専修大学にて開催）において読み上げた発表原稿に、誤記や脱落の訂正を含む若干の修正や補足を加えたものである。発表に際して司会の労を取っていただいた栗原裕次氏には感謝申しあげたい。発表後の質疑応答に際しては、納富信留、田坂さつき、神崎繁、渡辺邦夫、荻野弘之、三島輝夫、中畑正志、山本巍、山本健郎の諸氏からたいへん有益な質問や示唆をいただいた。また山本巍氏からは後日、文書にて丁寧な質問をいただいた。

多くの方々からいただいたこうした質問は、論旨展開の筋道を質すものを除けば、おおむね 2 つの質問に大別できるように思われる。ひとつは、ソクラテスによる「快と善の同

⁽²⁰⁾ 349e4-5, ὡς καλοῦ ὄντος αὐτοῦ σὺ διδάσκαλον σαυτὸν παρέχεις;

一」説（快樂主義）の主張、「いわゆるアクラシアの分析とその否定」の問題、「徳は知に他ならない」というソクラテスの主知主義など、本稿で卻けようと試みた、従来の『プロタゴラス』篇理解に十分対処できていないのではないかという趣旨のものであり、もうひとつは、本稿でその動向に注目しその趨勢を取り上げた「美」という価値のあり方をめぐめるものであり、「美がその姿を見せる時、恐れている自己へとまなざしが向けられる」との趣旨の論述に対して、我々が美に魅せられる時、「自分のことを忘れる」ということがあるわけだから、その点は如何かとの疑義の提示であった。

前者については、質疑応答の時間内に若干のことはお答えしたつもりであるが、勿論これらはどれも『プロタゴラス』篇理解の要石であり、また初期対話篇におけるプラトン哲学の基本線に関わる問題も含まれているし、私自身の中でも、これらの問題をめぐっては、未だ揺れて思いの定まらない部分もあるので、今後より詳細にテキストを検討し思考を重ねた上で、何らかの機会にお答えしたいと考えている。

後者に関しては、「自己」という言葉をやや不用意に用いた点は否めないし、さらに「美」という価値が、忘我的価値であることもご質問のとおりであるが、「美」と「自己」との関係、特に『プロタゴラス』篇においてその関係がどのように取り扱われていると理解すべきかについては、テキストの読みも踏まえ、もう少し検討してみたいと思っている。その上で、何らかの機会を捉え、幾らかなりとも応答ができればと考えている。

最後に、質問の労をお取りいただき、問題点を明らかにしていただいたすべての方々に深く感謝申しあげるとともに、こうした発表の機会を与えていただいたことに感謝いたします。